

今月の花

レンゲショウマ（8月9日撮影）

細江 久美子（撮影・文）



湿った薄暗い林の中で咲くレンゲショウマ。
「森の妖精」の名の通り うつむきながら
咲く可愛らしい花には 光がいつも当たって
います。

花言葉は「伝統美」

花が蓮に、葉がサラシナショウマ（晒菜升麻）
に似ているので、レンゲショウマ（蓮華升麻）
と付けられました。

軽井沢の晩夏を彩る花のひとつです。

（在；軽井沢）

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

アニミズムという捉え方がある。森羅万象、
生物にも無機物にも、草木にも、動物にも、昆
虫にも、風にも、山川にも、すべてのものに靈
魂が宿るとする考え方だ。

考えてみれば、子どもはみんなアミニストな
のだろう。時に彼らは、風になり、星になり、
月になり、ライオンになり、カバになり、アリ
になり、バッタになったりもする。子どもはみ
んな変身が得意なのだ。

わたしがまだ子どもだった頃、一番好きな昆
虫がカマキリだった。なぜって、持っている得
物がカッコよかったから。

「どきどきするほどひかっているカマ」で、か
かってくる敵を次々になぎ倒す。映画に出てく
る剣豪のように。「もえる ひをあびて / かま
を ふりかざす すがた」決闘後の夕陽のガン
マンのように。

工藤直子は憑依する。かまきりやこねずみや
へびやみのむしに。詩人とは、何にでも変身で
きる子どものころを持ち続ける大人のことを
いうのだろう。

『おれはかまきり』

かまきりりゅうじ

おう なつだぜ
おれは げんきだぜ
あまり ちかよるな
おれの こころも かまも
どきどきするほど
ひかっているぜ

おう あついで
おれは がんばるぜ
もえる ひをあびて
かまを ふりかざす すがた
わくわくするほど
きまつてるぜ

（工藤直子詩集『のはらうた』より）

※工藤直子：1935年（昭和10年）11月、台湾に生まれた日本の詩人、童話作家。平易な言葉を用い、思いがけぬ視点をもった子供向けの詩を多く執筆している。

あきる野にある自然・人・体験から学び 青少年の生きていく力を育む「あきチャレ」

遠藤 隆一

(あきる野サマーチャレンジ運営委員会委員長・
秋川第二地区主任児童委員)

この夏、僕らは旅に出ることにしました。



行き先は大好きな地元。
だけど、普段触れることのない地元。
「あなたにはできない」って、
学校や大人が口にするのをやってみよう。
山を登り、川を下り、
火をたいて、
温泉に入って、
体育館に泊まって、
みんなで支えあって90km歩いてみよう。
夏の暑さ、
降る雨、
仲間たちとの時間、
この旅での全てが何かを教えてくれる。

あきチャレの1シーン。1日約20km歩くので、足の裏が熱くなります。予定にはないお楽しみ企画で、水路に足を入れて休憩をしています。水の冷たさにビックリ。

はじめに

我が故郷、あきる野市は東京の西端にあり、山も川もあるとても自然豊かな地域です。私が子どもの頃の遊びといえば、仲間たちと川で泳ぎ、魚を見つけ、林でカブトムシやクワガタを捕まえ、山を駆け回り、落ち葉で布団を作るなどといった自然の中で遊ぶことでした。そして、水の冷たさに驚き、昆虫のいる林や山に仲間たちとワクワク・ドキドキした体験が、今でも私の中に残っています。

様々な生活環境の変化はあっても、この西多摩の自然は変わることなく存在しています。ですが、自然の中で遊ぶことは、その側面にある「危険」に着目され、だんだんと姿を消して行くことになってきました。

○ある一言が、私の生き方を変えた

2000年、三宅島の全島避難によって、あきる野市へ一時避難された島民の方々を社会福祉協議と共にサポートしていた国際的な組織である、あきる野青年会議所（JC）に入会することとなりました。その年に予定されていた活動を一時休止し、JCメンバーは、仕事や生活の合間で避難先に向かい支援活動をひたすらに続けていました。当時の私は活動には参加したものの、その活動の先にある光がよく理解できませんでした。

しかし、2001年7月13日、支援活動の一環で実施された島民向けのイベントで耳にした「ありがとう」の一言が、自分を大きく変える転機となったのです。こんな私でも、できるときに、できることを、できる限りやってみる。それが、「ありがとう」を生み出し、「ありがとう」をお届けできる。大きな学力や財もない自分が生きていく意味の一つはここにある。私の中に今まで感じたことのないあたたかい気持ちが湧き上がってきました。そして、その気持ちは私の中に今も湧き上がり、生きている時間の中

で拡がり続けています。

○「体験から学ぶ」試練の先にある子どもたちの隠された力

2005年、青少年の生きる力を育む目的であるあきる野JC主催の「第1回あきる野100km徒歩の旅」が実施されました。夏休みに地域の小学4年生から6年生が、高校生から大学生で構成される学生スタッフによって全面的なサポートを受けながら、JCの活動範囲であるあきる野市・日の出町・檜原村にある小学校に宿泊しながら4泊5日かけて100km歩きぬく事業でした。事業の企画立案の段階から「暑い中、歩いていて何かあったらどうする。」「100kmなんて歩けるわけがない。」など、様々な声が上がると、参加した子どもたちは学生スタッフと共に、夏の日差しを大きく浴び日焼けした顔で「100km歩くことができた」強烈な達成感と感動を勲章に全員がゴールしたのです。事業の綱領にあった「私には素晴らしい力があります。果てしない可能性があります。できる。できる。必ずできる。の精神で、一步一步前進すれば必ずゴールに到達することを知っています。」を、子どもたちや学生スタッフは一步一步の積み重ねから体現してくれました。

あのゴールから15年が経ち、名称や事業内容、構成されるメンバーに変更はあっても、その言葉は単なる言葉でなく、どの年も体験から子どもたちに大きな自信を提供しています。また、主催者である私たちをも応援する「リアル」な心棒（活動の中心・信じるもの）として、現在のあきチャレまで連続と続いています。

表1 現在までの歩み

名称	実施団体	実施年度
あきる野100km徒歩の旅	あきる野青年会議所	2005年～2011年（7年）
あきる野自然塾	あきる野自然塾運営委員会	2012年～2016年（5年）
あきる野サマーチャレンジ	あきる野サマーチャレンジ運営委員会	2017年～現在（3年）

○3つの「きょういく」・「体験活動」との出会い

青年会議所を卒業する頃より、あきる野市社会教育委員の会議への出向（現在、4期8年目）が決まり、子どもたちが学校や家庭以外で体験することやその意義、教師や親でもない人とつながることが子どもたちの成長に重要であるか、この地域で実現可能な体験の場の創造などを調査研究し、あきる野市教育委員会へ提言した。

その中で、学校や家庭の中だけでは提供することのできない自然体験をはじめとする様々な体験や子どもたちに他者が関わりあうことは、学びや気づきがあるだけでなく、子どもたちの心を豊かに育てるものだとして理解されていることがわかりました。その結果、私たちの活動として、普段できないことを【体験する】こと・様々な人が繋がりあい学びあい、子どもたちの未来を実現すること・故郷を学びの場とすることとしました。

表2 企画立案から作成まで携わった提言書

研究テーマ・年度	主な内容
大人・子どもの全てが輝くまちづくり (平成26年4月)	次代を担う子どもたちの健全育成、特に生きる力を育成するために家庭・学校・地域の連携・協力の強化を提言。子どもの生活・環境・体験に関する市民アンケートの実施。
人と人がふれあい、つながるまちにするために (平成28年4月)	地域と家庭の関係性や人と人が繋がりあう我がまちの現状と地域が子どもたちを育てる一役となることを提言。子どもを中心に活動をしている地域団体へのヒアリングの実施。3つのきょういく「共育」「協育」「郷育」への働きかけ。
だれもが主役のまちづくり (平成30年4月)	人が繋がりあう地域力が、教育大綱にある「あきる野の香りのするあきる野っ子」を育てることを提言。地域であきる野っ子を育てる「郷育」の具体的活動への働きかけ。

○そして、あきる野サマーチャレンジ(あきチャレ)へ

子どもたちの生きる力を育む目的で提供されてきた、あきる野100km徒歩の旅での達成感、あきる野自然塾での自然体験と郷土愛の育成、そして社会教育での調査研究を経て、あきチャレは誕生しました。

今年度は、16名の参加者と20名の学生スタッフ、20名弱の社会人スタッフにより実施されました。5日間の内容は、自然(山登り・沢登り・川下り)、非日常(ご来光・飯盒炊爨・体育館での宿泊)、協同(集団生活・異世代交流)、郷土(地元を90km歩きぬく)といった直接体験が主な内容となっています。

あきチャレでは、関わる全ての人の生きていく力を育むことが目的であるため、中学生から大学生で構成される学生スタッフは、自己の夢実現へのステップと、これから生きていく力の獲得を目指し4月からの研修に参加していきます。ここでは、年齢や学年、世代に関係なく全員が、「子どもたちの5日間を最高に熱くする」目的を持ったチームとして行動するため、学生さんにはこの活動はボランティアではなくあきチャレを共に創りあげて行くスタッフ(仲間)であることを説明し、自発的に学び、行動できるようになっていきます。

表3 年齢段階と参加のねらい

学生スタッフ	参加への狙い
中学生	過去の参加で得た経験と感謝の気持ちを、今度は恩贈りの一つの形としての参加。
高校生	先輩の大学生や、大人の話を聞くことで解消し、将来に対する自分の考えが具体化します。校外とのつながり、他者とのつながりから自分自身の強みを見つけることにつながります。
大学生	大人から直近の問題である就職について聞くことができ不安が少し軽くなる。また、学業と対公(おおよけ)の活動との両立をすることで、自身の活動が周囲の笑顔や積極的な変化に貢献できることを実感して、社会に出る(貢献できる)ことへの経験をつむ。

このような学生スタッフの献身的なサポートを受け、子どもたちは試練と困難の連続である5日間の旅を乗り越えていきます。足の痛みをこらえ必死に歩く子どもたち、自分自身も辛いにもかかわらず遅れそうな仲間の背中を押し上げ、手を繋ぎ、「歩ける！できる！がんばろう！一緒に歩こう！」と声を掛け励ましあいながら共に歩く子どもたち、「絶対にゴールする」と一歩を踏み出す子どもたちと出会うことができました。自分でもできた経験と感謝の言葉を述べ、涙を流してのゴールは、感動の一言に尽きます。

※学生スタッフ・子どもたちの感想、5日間の歩みを盛り込んだ報告書を作成中です。予備冊子も若干ありますので、ご興味をもたれた方にはお贈りいたします。(了)

Ⅱ 子ども研究ノート

青少年体験活動奨励制度のご紹介

(現・青少年体験活動アワード)

小森 伸一 (東京学芸大学学長補佐／准教授)

1. 青少年体験活動奨励制度とは

私が現在進めているプロジェクトの一つとなる、「青少年体験活動奨励制度」(現、「青少年体験活動アワード」)についてご紹介させていただきます。

青少年体験活動奨励制度(以下、体験奨励制度)の試行は、平成25年1月の中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」を発端とする、青少年の体験活動の機会拡充およびその仕組みづくりについて検証された取り組みとなります。その答申では、「今日の青少年をめぐる状況について、すべての大人が危機感を共有するとともに、体験活動の重要性を認識し、多様な体験活動を提供するためにできるところから早急に取り組んでいくことが求められる」と指摘されています。「体験活動の推進」に向けたわが国の教育施策の一環として提言されたものです。

文部科学省は、その答申に応じた具体的施策として「体験活動推進プロジェクト」等のいくつかの事業を今日までに展開してきています。当該制度は、その事業の一つとなる「体験活動を積極的に行って様々な力を身につけた青少年が社会で評価されるしくみ」という体験活動の評価・顕彰制度の試行を通じた調査研究について、一般社団法人教育支援人材認証協会(以下、教育支援協会)が、文部科学省からの委託事業として受けて始まりました。教育支援協会にその専門の委員会が設置され、平成25(2013)年度4月から平成29(2018)年度3月までの5年間において試行されました。当子ども支援学会の学会長である深谷昌志先生を初めとする、他役員の先生方(瀧口先生・中田先生・杉森先生・鈴木聡先生・鉄矢先生)が当該委員として尽力されてきたものです。私も初年度からのメンバーの一人で、4年目、5年目の2年間は委員長として運営に携わってきました。

最初の3年間は、高校生・大学生を中心とした「高大版」(14歳～25歳)が試行されました。高大版は、イギリス発祥の「英国エディンバラ公国際アワード」(以下、国際アワード)という国際的な体験活動制度を参考にしつつ、それに重ねて実施されました。それゆえ、活動修了者は文部科学省からの認証(修了証)に加え、国際アワードの「ブロンズ」レベルのアワード(認定)も授与されるという仕組みとなっていました(ブロンズが最も基礎レベルとなり、その上位レベルとして「シルバー」「ゴールド」と続きます)。この国際アワードの取得は、欧米諸国では就職や進学、奨学金獲得などの際にも評価されるものとなっています(当体験制度によって認証された修了証も履歴書に記載可能です)。なお、高大版における体験の区分と期間、ならびに実際に取り組まれた代表的な具体的活動例は下表1の通りです。

表1 高大版の活動例

対象者	ボランティア体験	教養体験	運動体験	自然体験
高大生 専門学校生	3ヶ月以上	3ヶ月以上	3ヶ月以上	1泊2日以上 (1日6時間以上)
	このうちいずれかは6ヶ月以上			
	1週間に1時間以上の頻度で活動を行うこと			
備考	1時間を数日に分割してもよい			事前準備や事前練習 を行うこと
主な 活動例	小学校での児童の学習支援／ 地域の清掃活動／庭園や花壇 の手入れ／チャリティ活動／ 地域の防犯パトロール／地域 の子どものあそび支援／ス ポーツの運営や審判ボラン ティア／イベントの運営、企 画ボランティア	・茶道の輝動的な所作を身につける／ TOEIC800点を目指した英語学 習／保育士資格取得へのチャレン ジ・ガーデニングの知識習得と実 践／ピアノ演奏練習で3曲マスター を目指す／速読技術を高めるための 読書／海外文化に触れるアフリカ 楽器の演奏／英検や数検、漢検な どの学習／家事全般(料理、洗 濯、掃除、家族の世話など	マラソン大会完走を目指した ランニング／代謝UPを目指し たウェイトトレーニング／有 酸素運動での脂肪燃焼を目指 したウォーキング／バタフラ イ習得を目指したスイミング ／外岩挑戦を目指したクライ ミング／コンテストへの参加 を目指したダンス	屋久島トレッキング／富士山 登山／洞窟探検と実測調査／ 動植物や昆虫の探索、調査／ 里山再生キャンプ／無人島探 検／地質、水質など自然環境 の探索、調査／星空観察のた めのキャンプ

体験活動の実施は、活動者の助言やサポートをする「アドバイザー」や各体験活動において参加者の活動を指導・確認する「コーチ」というボランティアの協力のもと進められます。主体となる活動者は、自ら実施した体験活動について、所定の記録 BOOK に記録していきます。アドバイザーは、最終的にこの記録 BOOK に活動の確認の署名やコメントをすることもその役目となります。そして、体験活動の終了後に、その記録ブックが事務局に送られて、修了（認証）の可否について審査されるというシステムとなります。下図 1 は、その一連の流れを表したものとなります。

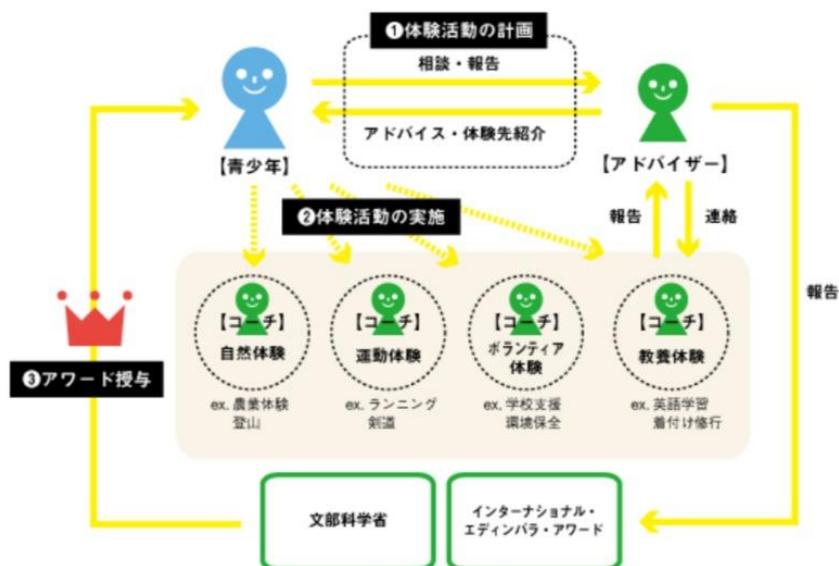


図 1 認証までの流れ

3 年目（平成 27／2015 年度）には、小学生（4 年生以上）および中学生を対象にした「ジュニア版」の試行が開始されました。高大版の仕組みを基盤としつつ、参加者が取り組む活動区分や期間などの内容を「高大版」よりも圧縮した形態としました（具体的には、活動区分を「ボランティア体験」「自然体験」「学習体験または運動体験」という 3 区分にまとめ、各区分での体験活動期間も短期で設定）。

4 年目（平成 28／2016 年度）以降、最終年度 5 年目（平成 29／2017 年度）までの 2 年間においては、ジュニア版が主軸として取り組まれました（この間、従来の高大版も並行して実施）。以下の表 2 は、ジュニア版における体験区分とその期間ならびに実際に取り組まれた代表的な具体的活動例となります。

表 2 ジュニア版の活動例

対象者	ボランティア体験	運動／学習体験	自然体験
小学生 (4 年生以上)	週1日 1時間程度 × 8回 または、 隔週で2時間程度 × 4回	週1日 30分程度 × 8回 または、 隔週で1時間程度 × 4回	3時間程度 × 2回 または、 6時間程度 × 1回
中学生	週1日 1時間程度 × 10回 または、 隔週で2時間程度 × 5回	週1日 30分程度 × 10回 または、 隔週で1時間程度 × 5回	4時間程度 × 2回 または、 7時間程度 × 1回
備考	30分～1時間を数日に分散してもよい		事前準備や事前練習を行うこと
主な活動例	- 幼稚園や保育園でボランティア - 駅前で花壇作り - 地域での清掃活動 - 共同募金 - リサイクル活動（古紙回収） - 地域の防犯パトロール - 地域の防災活動の補助（少年消防団）	- 武道・ダンスやバレエ - 球技・陸上競技・新体操 - 水泳・スキーやスケート - 部活動（地元スポーツクラブ） - 書道・演劇・美術鑑賞 - 歴史の学習・英検や漢検 - 読書・英会話・ピアノ - 家事全般（料理、洗濯、掃除、家族の世話など）	- 花や植物の観察調査 - 農作物の生産活動 - 学校での飼育活動 - 昆虫の観察・植樹への参加 - 海辺のごみ拾いなどの環境保全活動・海釣り - 自然を舞台にした遊び（ハイキングや登山） - 自然と触れ合う旅行

2. 当該制度の成果

5年間の試行における参加者数および修了者（達成者）の総数は、高大版が「〔参加者〕1079人／〔修了者〕764人」で、ジュニア版は「〔参加者〕843人／〔修了者〕656人」でした。それらの各合計数は「総参加者数：1922人／総修了者数：1420人」という結果となりました。下表3は、この参加者数／修了者数の結果について、試行5年間の年度ごとにおけるより詳しい人数を示したものととなります。

表3 試行5年間の人数

項目 年度	ジュニア版						高大版（シニア版）										総計	
	小学生		中学生		計		中学生		高校生		大学/専門生		社会人		計			
	参加者	修了者	参加者	修了者	[参]	[修]	参加者	修了者	参加者	修了者	参加者	修了者	参加者	修了者	[参]	[修]	参加者	修了者
H25年度	—	—	—	—	—	—	1	1	84	36	53	29	3	5	141	71	141	71
H26年度	—	—	—	—	—	—	13	12	79	54	138	78	5	5	235	149	235	149
H27年度	82	55	30	30	112	85	9	7	102	86	351	270	3	3	465	366	577	451
H28年度	158	138	229	163	387	301	0	0	53	37	61	49	0	0	114	86	501	387
H29年度	205	177	139	93	344	270	0	0	55	36	69	56	0	0	124	92	468	362
合計	445	370	398	286	843	656	23	20	373	249	672	482	11	13	1079	764	1922	1420

当該体験制度におけるその他の主な成果としては、参加者の活動の助言および支援をする「アドバイザーの育成・研修」を毎年実施し、アドバイザーを育成しつつ体験活動の機会拡充に努めました。また、当該制度の普及・啓発をねらった「シンポジウム・フォーラム」の開催や、毎年度の総括としての「表彰式」を文部科学省において行いました。さらに、毎年アンケートを中心とした「調査研究」を実施し、その有益かつ肯定的な結果が得られています（この調査については、当子ども支援学会・学会長の深谷昌志先生を中心として、その多大なるご尽力のもと行われてきました）。そして、ここまで上掲したような成果をまとめた「調査研究報告書」を毎年度末に作成し公表してきています。その報告書は、教育支援協会 HP 内に開設されている当該体験奨励制度の WEB ページよりその PDF 版をダウンロードして参照することができます（<http://japan-youth-award.net>）。

3. おわりに；次なるステップ「青少年体験活動アワード」へ（5年間の試行終了後）

冒頭で触れましたように、ここまで説明してきた体験活動奨励制度は、平成29年度3月の5年間をもって終了となっています。実は5年目の平成29（2017）年12月頃までは、翌年度以降も継続される方向で話が進んでいました。しかしながら、当時、重要政策の一つとして検討されていた「幼児教育・保育の無償化」や「高等教育段階の教育費負担軽減」にともなう財源措置の兼ね合いから、その影響を受けて当該制度への予算配分がなされない運びとなりました。そして、翌年度以降の試行の継続は、一転してなされないことになったのです（翌年平成30／2018年1月頃に決定）。

そのような事情で文部科学省の委託事業としての体験奨励制度は一区切りとなったものの、関係者の方々からは当該体験制度の継続の要望が少なからずありました。その声に応える形で、その翌年度（平成30／2018）は、教育支援協会の中に「青少年体験活動奨励制度ワーキンググループ」が作られ引き継がれることになったのです（文科省のお墨付きはなくなりましたが）。私を含む体験奨励制度委員会の2名、事務局スタッフ1名、アドバイザー数名の有志で構成され小規模ながら継続されました。

さらにその後となる本年度、令和元（2019）年度では、名称をよりシンプルにした「青少年体験活動アワード」として再出発しています。それは、当該運営組織の帰属元が、これまでの教育支援協会から一般社団法人 東京学芸大 Explayground 推進機構（以下、EXPG 機構：<https://explayground.com>）へと今年度から変更になったことを機にそうになりました。活動内容などは、これまでと基本的に同様です。EXPG 機構は、「公教育におけるオープンイノベーション」を進めるための全国的拠点を構築するために、東京学芸大学と Mistletoe 株式会社において包括的事業協定が締結され発足されました。今後はこの EXPG 機構を母体とし、これまでの5年間の試行において培われてきた体験奨励制度の財産を踏襲しつつ、改善を加えながら引き続き進めていくつもりです。

委託事業終了後は、とくに既定の予算措置はなく、有志の寄付を財源とした非常に小さなボランティア

ア組織による小規模かつ省エネ運営でやってきています（その安定した財源確保や体制づくりも、今後の課題です）。しかし「継続は力なり」の精神で、さらなる青少年の体験活動の機会拡充と、その多様な体験に基づく十全な人間育成へとつながるよう、これからも微力ながら貢献、挑戦していく所存です。（当体験活動アワードに関心や質問のある方は、以下にご連絡いただければ幸いです）

E-mail : info*japan-youth-award.net（*を@に変えてください）

※ホームページは準備中です。

※ [参考] Facebook : <https://www.facebook.com/青少年体験アワード-1029125923952542/>

Ⅲ. ウガンダ通信・・・・・・・・・・・・・・・・（2019年7月28日）

忘れがたき恩師の思い出

宮本宗一郎（国際ボランティア：在ウガンダ）

子ども時代に、教師（先生）との出会いから、生涯忘れることができない思い出（感動・感謝・教訓を伴う）を心に刻むことがあります。

ここで紹介する恩師は、私が福岡県若松市（現北九州市若松区）古前小学校時代（昭和31年から昭和36年）に、6年間ずっと担任をしてくださった「山田桃子先生」です。

1. 名前の大切さ

私が小学校2年生の時でした。私の名前は「宮本宗一郎・みやもとそういちろう」と大変長い名前です。名前を書くのに時間がかかりました。ある時、テストがあり、先生が問題用紙を配って「では、始めなさい」と声を掛けました。私は、一生懸命時間をかけて名前を書き終わりました。その時、隣のB君を見ると、彼は既に2問目の問題に取り組んでいました。そうしたことが何回か続き、子ども心に何か変だなと考え、次のテストの時から、「みやもとそう」と書くようにしました。

それが何回か続いたある日、担任の山田先生から「宮本君、今日は放課後教室に残りなさい」と言われました。何か悪いことをしたかなと不安を覚えながら一人で教室に残りました。しばらく待っていると、山田先生が教室に来て私の目の前に座りました。

先生は、開口一番「どうして宮本君は、<みやもとそう>といつも書くの」と聞きました。それで、私は、テストの時に自分の名前を書き終わって隣のB君を見るともう2問目に取り掛かっているの、おかしいと思って名前を短く書いた旨を答えました。

すると、先生は、「そうだったのね。良く分かりました。しかし、名前は、宮本君のお父さんとお母さんが一生懸命考えて付けてくれたんです。だから、名前はとても大切なんです。宮本君の名前は、<みやもとそういちろう>です。<みやもとそう>ではありません。分かりましたか。次からは全部名前を書くんですよ」と私の目をのぞき込むようにして諄々と諭してくれました。私は、「次からは全部書きます」と答えると、先生は手を差し出して、「指切りげんまいよ」といって私の手を取りました。

それから、しばらくして、テストの時間が来ました。山田先生は、いつものように問題用紙を配りました。以前はすぐ「それでは始めなさい」と話しましたが、この時は、「テストを始める前にまず名前を書きなさい」と言いました。私はいつものように時間がかかりましたが、自分の名前を全部書きました。すると、先生は「宮本君、書きましたか」と聞きましたので、私は「書きました」と答えました。すると先生は「ではこれからテストを始めます。始め」と声を掛けました。

小さな子どもの話をしっかり聞いて、それに対して適切な対応を取っていただいたのです。名前の大切さを教えていただいた山田先生の対応に、今でも感謝の気持ちが沸き起こってきます。

2. 戦争は絶対にダメです

6年生の時でした。8月6日の朝、山田先生はいつもより少し厳しいお顔で教室に入ってきました。みんな緊張していると、次のようなお話をしました。

「皆さん、第二次世界大戦の昭和20年8月6日に広島に、また9日に長崎に原子爆弾が落とされたことは知っていますね。広島にはその時先生の妹がいました。8月7日の新聞を見ると、「広島に新

型爆弾が投下され、何万という人が死亡した。広島は一緒にして灰燼に帰した。」とあり、記事を読むと、多くの人が水を欲しがっていると書いてありました。先生は、妹のことが心配で、いても立ってもいられず、翌日水筒をもって列車に飛び乗り、広島に向かいました。

広島に着くと、一面焼け野原で言葉を失いましたが、妹のところに行かなければという気持ちが強く、記憶を頼りに妹が住んでいた方向に向かいました。途中、いたるところに人が死んでいました。また、全身やけどを負って、腕の先から焼けた腕の皮膚をだらりと垂らした人もたくさん目にしました。まるで地獄のようでした。その人たちが先生の水筒を見て、「水をください」「水をください」と懇願したのですが、先生は、この水は妹に飲ませるんだと、その場を走り去ったのです。

やっと妹が下宿していたと思われるところにたどり着きましたが、そこも一面焼け野原でした。5日程滞在しました。その間、雨も降りましたが、黒い雨でした。雨に濡れながら必死に妹の痕跡を探し続けましたが、何も見つけることができませんでした。

広島駅に帰る途中、水を欲しがっていた人がいたそばを通りましたが、それらの人はおらず、近くに死体が山のように積まれていました。死体の臭いがあたりに漂っていました。先生は、水を飲ませてあげればよかったなあと、悔みました。その後も、しばらくの間、後悔の念に苛まれました。

皆さん、いいですか。絶対に戦争をしてはいけませんよ。絶対にダメです。戦争はダメです。」と話された先生のお顔と声は、今でもはっきりと思い出すことができます。

私は、戦争は反対です。戦争につながる如何なる策謀にも反対です。それが、私たちに語り掛けてくださった山田先生の思いに通じるからです。

その後、私が東京で大学生として暮らしていた時、風の便りで山田先生が50歳という若さで、白血病で亡くなったということを聞きました。私は、先生はあの時、広島で放射能を浴びたのだ、先生は原子爆弾の犠牲者だと直感しました。今でもそうだと確信しています。戦争と平和の問題が話題になる時、私はいつも山田先生を思い出します。

3. エジプトに行きなさい

6年生の国語の授業の時です。詳しい内容は覚えていませんが、エジプトの色々なお話とそこに咲くコスモスの花のことが内容だったと記憶しています。授業の終わりに、山田先生が私を指して、感想を尋ねました。私は、「大きくなったらエジプトに行きたいです。」と答え、先生は「エジプトに行きなさい。宮本君だったらきっと行けます。必ず行くんですよ」と励ましていただきました。先生の励ましのお言葉は、私の頭の片隅にいつまでも残っておりまして。

その時から60年近くの歳月が経過しました。今、私はアフリカのウガンダという国の大地に立っています。首都カンパラから北に550km離れたKitgumという田舎町で、貧しい子どもたちのために教育支援活動を行っております。子ども図書館の設置運営・図書館内の寺小屋教室の開催・地元のPrimary School（小学校）への通学支援を、妻と二人で行っています。妻は15年以上前から、私はリタイアした7年前からボランティア活動を続けてきました。

エジプトは、世界最長（6700km）の大河ナイル川が運んでくる肥沃な土壌によって発展し、古代エジプト文明を繁栄させました。そのナイル川の源流は、1858年にイギリス人探検家のスピークが、ウガンダのビクトリア湖であることを発見しました。ウガンダのビクトリア湖から流れたナイル川（白ナイル）は、途中エチオピアから流れる青ナイルとスーダンで合流し、最後はエジプトから地中海に流れ込んでいます。エジプトとウガンダは、大河ナイル川によって結ばれているのです。

山田先生と約束したエジプトではありませんが、エジプトと深い関係のある、同じアフリカのウガンダに来ることができました。長い時間がかかりましたが、「先生、約束を守りましたよ。夢が実現できたのは、先生の励ましがあったお陰です」と、お伝えしたいです。

4. おわりに

山田先生には、「山田先生、ありがとう。ありがとう、山田先生」と声を大にして叫びたい気持ちで一杯です。私の体験から申し上げたいのは、教育に携わる方々は、その言動を通して子どもや学生・生徒に大きな影響を与える存在であるということです。

自信を持って信念を踏まえて、子どもや学生・生徒に向き合って欲しいと思います。そうすれば山田先生のように、多くの子どもや学生・生徒に感動と良き思い出をもたらすことができると思います。教育に携わる方々にエールを送りたいと思います。(了)

IV. 新書版にみる「子ども問題」2

「海外で研究者になる」増田 直紀 中公新書 2019.6

深谷 昌志(東京成徳大学名誉教授)

○何十通の不採用の通知にめげず

帯に書かれている「日本の常識は世界の非常識」に惹かれて本書を手にとった。著者は東大の工学系大学院修了後、東大の研究員そして准教授を経て、2014年からブリストル大学(ブリストル市にあるイギリスの公立大学。ノーベル賞受賞者を12名輩出し、世界大学ランク30位の名門大学)の上級講師をしている。専門はネットワーク科学で、1976年生まれだから43歳の気鋭の研究者である。本書の中で、著者はどうして海外の大学教員になることを志し、そのために、どういう努力を重ねたかを赤裸々に記述している。

筆者は50年に及ぶ大学人生活を送ったので、6つの大学に籍を置き、この間、子ども調査のために多くの海外の学校を訪ねた。しかし、残念ながら、他国の大学に長期の籍を置いた経験はない。また、知人の研究者の中にサバティカル制度を活用して海外の大学に1年程度籍を置いた人も多いが、その体験もない。そうした意味では、外国のトップレベルの専任の教員になるというのは考えたこともない雲の上の話だ。

著者は、若い世代の研究者に日本の閉鎖的な大学環境から脱して世界の大学の専任教員になることを目指して欲しいと、就職のためのノウハウを具体的に披歴している。本書には、研究のテーマを魅力的に提示する方法、あるいは、自分のキャリアを際立たせる書き方。さらに、採用にこぎつけた時の条件の折衝の仕方などの実例が詳細に記述されている。何十通もの不採用の通知がきても、めげずに応募書類を出し続ける。そうした神経のタフさも大事なところが、それが良い研究条件の確保に通じるという。

○深刻化するポスト・ドク問題

欧米の大学では教員採用にあたって任期制をとる事例が多い。それだけに、教員の方も条件の良い大学への異動を目指すので大学教員市場の流動性が高い。そうした中で、大学教員を目指すのはテニュア資格の取得だ。任期制が基本の大学でも、「テニュア持ちは、定年までその職に居座ってよい。アメリカでは研究費を引っ張ってこられる限り定年すらない」(P.164)という。そのためには、厳密なテニュア審査を通ることが必要となる。

30年程前、シアトルのワシントン大学を訪ねた時、何人かのテニュア教授を紹介してもらった。どの先生もワシントン大の暮らしが20年を超える70代の教授だったが、キャンパスの人たちが畏敬の念を持って接しているのが分かった。その姿を見て、自分もこうした晩年を送れる研究者になりたいと願った。

そうしたテニュアと対照の問題だが、日本では、現在、ポスト・ドク問題が深刻化している。大学院の博士課程を修了し(博士号を取得し)ても、研究職につけない人の問題を指す。博士課程の在籍者は平成3年の3万人から平成13年の6万6千人、そして、平成23年に9万2千人と増加してきたが、就職先である大学教員の求人は少子化の影響を受け学生数が減少しているので、どの大学も採用を抑制している。そのため、博士課程を終えても、定職につけないポスト・ドクが急増する。さらにいえば、修士の2年、博士の3年を経るから、ポスト・ドクは30歳に近く、今さら一般企業の門も叩けない。となると、大学の非常勤講師—1コマだと、多くて月に2.3万程度—か塾の講師かで糊口をしのぐことに

なる。子どもはむろん、結婚も躊躇するだろうし、社会保障の積み立てもしていないから老後も心配だ。中高年の高学歴プアの誕生である

○日本のポスト・ドクも海外に目を向けよう

東京とサンフランシスコの子との国際比較調査を実施するため、サンフランシスコ州立大学を訪ねた。相談に乗ってくれた教授は調査に乗り気だったが、本部に相談すると、州内の調査なら了解するが、国際比較調査はこの大学になじまないという理由で、バークレーの担当教授への紹介状を書いてくれた。聞いてみると、カリフォルニア州の大学は、①研究を主とするUC(バークレーやUC L Aなど)と②専門職を養成する州立大学、③市民カレッジ的な大学の3層に分かれ、それぞれが機能を分化している。国際交流でも、比較調査のような研究は①レベルの大学で、②は大学教員間の交流、学生の交流は③のように役割を分けているという。そして、博士課程も①に研究主体、②に専門職養成の課程が設置されていた。

その時は変な区分という印象を受けたが、日本では、どの大学も同一レベルに並列するので、権威づけのために、どの大学も博士課程を設置しようとする。しかし、博士課程の指導に不向きな教授が指導にあたり、未熟な論文で博士号をだす事例を見かける。その結果、ポスト・ドクとはいえない未熟なドクが誕生するが、指導教員は知らんぷりを通しがちだ。

もちろん、優秀なポスト・ドクも少なくない。本書には世界の大学で活躍している17人の若手の研究者の事例が紹介されている。専攻も大学もさまざまで、多くの研究分野でグローバルな動きが広まっているのを感じる。だとすると、日本のポスト・ドクも狭い日本内でいじけていないで、世界の大学を目指してはどうか。筆者も、もう一度、研究者人生を繰り返せるなら、海外にチャレンジしたいと思った。

○子どもの送り迎えは家庭人としての当然の行為

本書の骨格とは関係ない話だが、読んでいて、興味深い挿話に出会った。奥さんも大学の教員なので、著者は子どもを迎えに2時半に大学を出て、3時15分に学校へ着く日程を組んだ。たまたま、同じ時刻に大学内の会議があったが、私的な行為なので、理由を云えずに会議を休んだ。あとで同僚に事情を話すと、「そういう理由なら、言えば大丈夫だったのに」と言われる。「子どもの送り迎えが理由として成立する！これには驚いた」(P.133)という。

欧米では11歳一国により年齢が異なる一位まで、子どもを一人にすると、ネグレクトという理由で親が逮捕される。十年程前、外務省がアメリカ在留邦人向けに警戒情報を流したのは、子ども連れでスーパーに行った母親が、店内に忘れ物をして、車に子どもを残し、店内に戻った。その数分間に通報されて、母親がネグレクトの現行犯として逮捕されたという事例だった。となると、学校の送り迎えも親としての大事な義務となる。したがって、増田氏の場合も、私的なものでなく、親としての義務を果たす大事な行為となのであろう。

研究者であっても、子どもの送り迎えは親としての責務。そうした感覚が大学でも定着している。競争の激しい研究者であっても、本人がダディ・トラックを大事にし、周囲もそれを尊重する文化が定着している。ここにも、「日本の常識は世界の非常識」、あるいは、「世界(イギリス)の常識は日本の非常識」の実例が見られる。

V. 会員談話室

会員自己紹介

佐々木 教子(北区立浮間小学校教諭)

東京の下町にある寺で生まれ育ちました。サラリーマンの家庭とは、だいぶ違う環境だと思えます。母親自身も寺の娘だけあり、人様に迷惑をかけることを嫌いました。

その母とは、幼少の頃に死別し、その後父親が再婚したので、米寿間近の今の母に大きくしてもらい感謝しています。

私が教職を目指した理由は二つあります。私を産んでくれた母が父に嫁ぐ前、小学校の教師をしていたこと。家の近所に見る度に鼻水を垂らしている男の子がいて、時々遊びに訪ねてきたとき

「なんで、ゆっくりとしか話せないのだろう。」と関心をもったことです。

教職についてからの経験は、全てビタミン剤になると考えるようにしました。私生活での両親（病気）弟（交通事故）の別れや子育ての悩み、嫁姑問題などは、仕事に生かせる一部にしておこう。担任としては、寄り添えなかった児童がいたこと、理解を得られなかった保護者がいたこと、女性校長からパワハラを受けて精神的に追い込まれたことなども自分が選んだ教職人生の大事な経験の一つだと前向きに考えました。経験値0から出発した教職人生ですが、どれくらいの数値になったかわかりません。しかし、私が持つ引き出しにはたくさんの技術話術を詰め込んでこられたと思っています。

現在は、新人育成教諭としてピカピカの教師一年生の指導をしています。その新人が一年後に自立し教師として生きていけるように寄り添っていきたいです。

方 明生（ほう めいせい）（中国[上海杉達学院大学](#)）

中国上海杉達学院教育学院で教鞭を取っている方明生というものです。同学院の小学教育学部の主任もしております。もともとの専門は比較教育学・比較カリキュラム論で『日本生活綴り方教育研究』を博論として書いて（上海教育出版社、2002年）、『現代日本の教育課程改革』（水原克敏著）なども訳しました（教育科学出版社、2005年）、13年ぐらい前、日本の大学との交流で（中国上海師範大学教育学院）子ども学をやり始めました。「子ども家族社会史研究の使命」『ASIA—社会・経済・文化』第2号（2012）「現代中国の都市空間と子どもの問題」『子ども観のグローバル・ヒストリー』14章、原書房、2018年、等の日本語の論文を書いて、「ユクスキュル「環世界」論生物学とその子ども学構築の意味」『教育生物学雑誌』第五巻第3期（2017）などの中国語の論文も出しました。学部生の時代は日本語専攻で、翻訳が好きで、『世界文明史の試み』（山崎正和著）上海訳文出版社、2014年、『丸谷才一小説集・樹影譚』上海文化出版社、2010年、などの訳書も出しました。

自己紹介を履歴のようなものと勘違いをして、『風の便り』6月号を見てわかり、慌てて直してみましたが、もともと硬い文で直せようがない部分があります。ご了承ください。情報だけ参考になれば、と思います。これからもよろしくお願いします。

黄 博（こう はく）（中国[上海杉達学院大学](#)）

皆さま、初めまして、黄博と申します。この度は、子ども支援学会に入会させていただきどうもありがとうございました。とてもうれしく思っております。

さて、私は上海杉達学院という中国の大学で教職に就いておりますが、二年ほど前に、娘の誕生がきっかけで、幼児教育の世界に出会いました。

中国の幼児教育の事情といえば、0歳からの英才教育、仕事を持つ母親の合間育児（造語ですみません）、祖父母の参加による多人数育児、一人っ子がまだ主流という家庭環境など、家族構成や育児の主体という面において、日本と違うキーワードを見せております。

そのような教育事情を体験しているうちに、長年日本語担当の大学教員をやってまいりました私は、中日幼児教育の違いに関心を持つようになり、もっと深く考えてみたいという気持ちにもなりました。まだまだ幼児教育の初心者ですが、できればまず「絵本」にテーマを絞り、考えてみたいと思います。

子ども支援学会で色々なことを学んでいきたいと思っておりますが、ご指導いただけますよう、どうぞよろしくお願い致します。

高橋 弘夫（東京都北区[神谷保育園](#)理事長）

私が幼いころ、60年安保闘争をみていた母が「子どもたちがまた戦争に……」と、つぶやいていたことを時折思い出します。25年ほど前、我が子がお世話になった当時の保育園園長に母の「つぶやき」を話すと、大きくうなずき、「子どもたちの可能性を無限に伸ばし、健康で、そして平和な社会をつくっていきましょう」と、更に付け加え「保育園は単に子どもを預かるだけでなく、幼児教育の実践の場です」と力説しました。園長は太平洋戦争末期、日本で初めて保育園を疎開させることに挑んだ保母たちの一人だったのです。余談ですが、この実話を描いた映画「[あの日のオルガン・疎開保育物語](#)」が今年2月に全国映画館で公開され話題となりました。

園長との出会い以降、この保育園の評議員に推薦され、理事を経て、当時の保育理念を受け継ぎ「豊かな心の子ども・確かに考え判断する力・ひとつのことをやり通す意志の力・健康なからだ」を保育目標

に現在、理事長として保育園の経営に当たっております。

最近、幼児期教育の重要性を実感し、特に「親と子の心の交流」をテーマに活動しております。また昨年夏、有志で小学生を対象に「寺小屋子ども食堂」を立ち上げました。子ども支援のキーワードは「共感、共生、信頼」だと確信するこの頃です。

弘田 栄子（[クレセールこころの相談室](#)室長）

私は10年くらい前まで埼玉の公立中学校の教員を30年間勤めておりましたが、最後の5年間教育相談の担当となり、心理学のいろはも知らないことに気付かされ、東京盛徳大学院の門を叩いた次第です。そこで、多くの先生のご指導を仰ぐことができたのは運が良かったとしか言いようも有りません。その後戸田の教室で発達障害のお子さんとは4年間ともに学び、閉室に伴い、赤羽に相談室を院生の協力を得て開室致しました。その間専門学校で教育過程の講座を持たせて頂いたのも勉強になりました。8年ほど前から北区の要請により放課後等児童サービスを開室し、3年前から第2も開室し現在に至っています。まだ赤字ですが今年こそプラスマイナス0になるよう頑張っています。趣味はドラマを見ることです。よろしくお願いいたします。

赤藤 和仁（[東京成徳高校](#)教諭）

東京成徳高校で書道を担当しております。北海道出身です。

就職して数年たち、不登校の生徒との関りがありました。なんとかしたいという思いから教育相談に興味を持ち学んできました。種々の研究会に参加したり、日々の生徒達の様子やその対処について伺うのも勉強になってきました。そして東京成徳短期大学の時代、先生方と共同研究をさせていただいたことも忘れられない思い出になっています。

本年度担任を外れ、学年副主任という立場で、全体を見ながら、担任の先生方と生徒のことについて話し合う機会が増えました。もう一歩違う視点での勉強もしつつ、生徒や先生方をサポートできればと考えております。

日常では毎日書道展他への出品をしています。日展にも毎年参加していますが、一年かけて取り組んだことがそこに集約されていることだと思い、反省の8月を毎年迎えます。東京オリンピックも近くなりますが、スポーツ選手が成果を出すための努力を伺いながら刺激にしております。

あと数年で定年を迎えます。多く子どもたちとの接点を持つべく、書の教室を展開、そして指導者の育成を60代からの目標にしています。現代の子供たちの側面を知り理解を深めるためにも、深谷先生ご夫妻はじめ先生方と接点を持たせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

外山 千草（[鹿児島県沖永良部事務所](#)）

このたび、こども支援士申請を機に、子ども支援学会に入会しました外山千草と申します。東京学芸大学卒業後、鹿児島県職員（農業分野の普及指導員）として勤務し、現在沖永良部島の出先機関で食育や地産地消等の地域活動支援に従事しています。

学生時代の和子先生の初めての講義は今でも強く印象に残っています。ジェンダーの視点、子どもの立場に立って支援することの大切さ、本当に数多くのことを学ばせていただいた貴重な時間でした。

私は社会人となって第2子を出産後、社会福祉主事・家庭児童福祉主事として勤務する機会にも恵まれました。闇に隠れている様々な子どもに関する問題を目の当たりにし、なおかつ緊急対応案件の多さや複雑さに衝撃を受け、この地域に住む私自身が何とかしなければという使命感に駆り立てられました。現在、星槎大学大学院教育実践研究科（専門職学位課程）で学び始めて2年目となります。地域でのインフォーマル・ノンフォーマルな新しい学びの充実に向け、子ども支援学会でも多くの方々との交流を図りながら、今後も自己研鑽に努めて参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

句会 むさしの

○韜晦の出羽の秘仏や秋桜

安田 勝彦

名月や阿修羅の顔の岩の肌

奥の細道を昨年から歩いていますが、今回は、山形戸沢村から最上川を下り羽黒山、月山、湯殿山を訪ねました。廃仏毀釈の激しさを増す中で密かに仏像を匿った篤志家の人が、仏像を公開しました。廃仏毀釈の急先鋒であった羽黒山神社で、その秘仏展を行った事に歴史の流れを改めて感じました。その一句が韜晦（とうかい）の句です。

○遠花火ことば少なに時流る

市原 潤

夏草や浮島のごと畑あり

今年の畑の夏は、蟬の喧しい鳴き声・猛々しい夏草、シオカラトンボの飛来、割れたスイカの中にカブト虫、体にまとわりついてきたカマキリなど、珍しい出来事が多々ありました。

○妻の待つ 窓辺に映る 百日紅

森永 徳一

病む妻と共に過ごす最近の心境です。

○雌日芝も名を覚えれば愛しけれ

上島 博

庭の草むしりに追われている。いろいろな雑草は見た目もちがうけれど、抜くときの感触もそれぞれだ。引きやすい草、固い草、やわらかいけれどちぎれて抜きにくい草……。草の名が分かれば草引きも楽しくなろう。ネットで調べてみると、あらためて種類の多さに感じ入る。一番ポピュラーなメヒシバは成長が早く、庭中にはびこるが、案外抜きやすい。地下茎が奥深くつながるハマスゲは、名を覚えても憎らしいだけである。

○孫帰り代わりに来たかカブトムシ

三輪 葉月

山荘に皆で集まって過ごしましたが、一足先に甥っ子が帰ってしまったその夜に、カブトムシが舞い込んだんです！寂しがってる義母は癒され、送った写メを見て当の甥っ子は「いーなー、僕がいる間に来てくれたらよかったのに」と残念がっていました。

イベント情報

第7回ワークショップ 2019.11.30 (土) PM.2:00~4:00

「現代の親の養育意識を探る (学会調査)」

深谷昌志 (東京成徳大学名誉教授) 他 司会: 河村 真理子 (育英幼稚園園長)

第8回ワークショップ 2020.2.8 (土) PM.2:00~4:00

「里子・里親問題を考えるー里子の自立を中心として」

講師: 青葉紘宇 (東京養育里親の会理事長) 司会: 石田 祥代 (千葉大学教授)

第9回ワークショップ 2020.5.9 (土) PM.2:00~4:00

「多国籍化する学校・II」

講師: 土田雄一 (千葉大学教授) 司会: 由田 のぼら (東京成徳高校教諭)

第10回 ワークショップ・オープン 2020.8.14 (金) PM.2:00~4:00

*発表者を募集し、9月中旬には決定する予定です

司会: 明石要一 (敬愛短期大学学長)

みなさま、ふるってご参加ください。会員でない方のご同伴も歓迎いたします

編集後記 (ニューズレター委員会)

「風の便り」2019年9月号をお届け致します。会員が120人を超え、掲載させていただく自己紹介は1号5、6人で、一回りに6、7年もかかることになります。ご希望の方は、どうぞ500字内外の自己紹介のお原稿をお送り下さい。できるだけ到着順に掲載させていただきます。また、「句会むさしの」へのご投句もお待ちしております。(kazukofukaya@nifty.com) また今月から、三島市の中園孝信先生に代って軽井沢の細江久美子さんが、巻頭の写真を担当してくださることになりました。

なお今月は、海外から「ウガンダ通信」をいただきました。胸をうつ内容でした。改めて、広島で二次被爆された山田桃子先生のご冥福をお祈りいたします。

<編集委員>

深谷和子 (長)・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子
近藤和子*・佐々木教子*・塚本文子* (*印: 子どもQ&A 委員)

※「子どものころ: Q&A」は、この号から学会HP「子どもQ&A」へ移行しました

<風の便り 2019年9月号目次>

	<u>今月の花・今月の詩</u>	細江久美子・ゆあさとしお
I	<u>実践報告</u>	遠藤隆一
II	<u>子ども研究ノート</u>	小森伸一
III	<u>ウガンダ通信</u>	宮本宗一郎
IV	<u>新書版に見る「子ども問題」</u>	深谷昌志
V	<u>会員談話室</u>	
	<u>会員自己紹介</u>	佐々木教子 方明生 黄博 高橋弘夫 弘田栄子 赤藤和仁 外山千草
	<u>句会 むさしの</u>	安田勝彦 市原潤 森永徳一 上島博 三輪葉月
	<u>イベント情報</u>	
VI	<u>編集後記 (深谷和子)</u>	